



TITLE:

計画2-1 屋久島野生ニホンザル群における群れの消滅と隣接群へのメスの移入過程(III 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

竹門, 直比

CITATION:

竹門, 直比. 計画2-1 屋久島野生ニホンザル群における群れの消滅と隣接群へのメスの移入過程(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1991, 21: 56-56

ISSUE DATE:

1991-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164274>

RIGHT:

研究費を用いて、同山系北部での現地調査及び聞き込み調査を集中的に行った。調査地は滋賀県神崎郡永源寺町から、岐阜県不破郡関ヶ原町をへて、三重県員弁郡大安町までの範囲で、霊仙山、御池岳、藤原岳、竜ヶ岳など1100m前後の山々を含む。

山間及び山麓の集落の大部分でサルの出没と猿害が認められたが、山間の村では過疎化が著しく廃村化しているところも多く、詳しい情報を得ることができなかった。その一方山麓部では、この10年から15年の間に、それまでサルなど出たこともないところで、突然群れによる食害が発生しその後も被害の絶えないところがおおい。とくに、滋賀県永源寺町、愛東町、湖東町付近、及び三重県藤原町、北勢町付近では、山麓部からさらに平地部にもサルが進出しており、水田や畑に取り囲まれた雑木林や杉林をねぐらとして野荒らしに出回ることさえあるという。

では山中の環境条件がニホンザルの生息に好ましくなり、個体数が増加した結果、山麓部に分布を拡げてきたのだろうか。現地調査の印象からいえば、全く逆であり、サルの生活を支えていた広葉樹薪炭林は、ほとんど全域において生物相の貧弱な針葉樹人工林に造り変えられており、住みかを追われ、「難民」化したサル達は、なり振り構わず人里に近づき、野荒らしで身をしのいでいるのであらうとおもわれた。

本山系に限って言えば、分布域の拡大が必ずしも生息条件の良好化や個体数の増加を意味しないというのが目下の予測である。

課 題 2

計画2-1:

屋久島野生ニホンザル群における群れの消滅と隣接群へのメスの移入過程

竹門直比(京都大・理)

屋久島西部の海岸林に生息するM群では、近年、個体の消失が相次いだ。筆者が観察を開始した1984年春には、16頭を数えたM群も、1989年夏の時点で、オトナオス1頭、オトナメスと娘のワカメスの計3頭となった。この段階で、オスは単独行動が増え、母子のメスは、音声交換もほとんど行わなくなり、南から侵入してきたH群に

占有域のほとんどをのっとられてしまった。

1989年の交尾期が始まると、オスは北に隣接するT群へ移籍した。メス2頭は、オトナメスが発情するとH群に追従し、H群のオスと交尾していた。ただしオトナメスは、オスとのみ親和的な交渉をもち、H群のメスには攻撃されていた。これに対しワカメスは、H群のワカメスと毛づくろいをかわし、音声交換に加わって、メスとの交渉を行っていた。しかし、オトナメスの発情が終わるとかれらはH群とは別行動をとった。

1990年4～5月の調査時期は出産期にあたり、H群では3頭の赤ん坊が確認された。M群のメス2頭は、いずれも出産は確認されなかった。

H群の遊動域は北へ移動しており、もとのM群の遊動域内を遊動していた。M群の2頭のメスは、周辺部ではあるがH群の動きに追従しており、移籍の兆しを見せていた。

オトナメスは、H群のメスに接近するのを避けており、毛づくろいや、伴食関係をもつのはオスとに限られていた。しかし、音声交換には参加するようになり、H群のメスの方から毛づくろいを要求することもあり、前年の交尾期に比べ、メスにも受け入れられていた。ワカメスは、母親のオトナメスと離れて、H群の中で毛づくろいや伴食を行うことも増え、よりH群の中に定着していた。

メスは生まれた群れで一生を過ごすニホンザルの社会でも、群れの消滅という極限状態におかれると、メスは群れを移籍して生き残るという手段をとることが、この調査で明らかになった。メスは、ソリタリー生活をおくることは難しく、たとえ、新しい群れの中で攻撃を受けようとも、移籍という道を選んでいる。またこの際、オトナメスよりも、ワカメスの方が、メスの社会に受け入れられやすいということができよう。

計画2-2:

ニホンザル野生群におけるオスの社会的発達

鈴木 滋(京都大・理)

屋久島西部海岸域において1987年度以降継続して野生ニホンザルT群の観察を行なった。本研究では、非交尾期にもコンパクトな集まりを保ち、複雄複雌群で生活するニホンザルで、ワカモノからオトナへの移行期にあるオスが、非性的なオスー